

平成二十五年十月六日印刷
〒 一一一—〇〇二二
台東区清川一—八—一一
光 照 院 発 行
TEL〇三三二八七二二八四八七

光 照 院 だ よ り

道 詠

法然上人

極楽へ
つとめて早く
出で発たば
身の終わりに
参りつきなん

お袖をつかんで第四步

すべてはうつろいゆくものなのに

◆路上生活の人びとの記憶

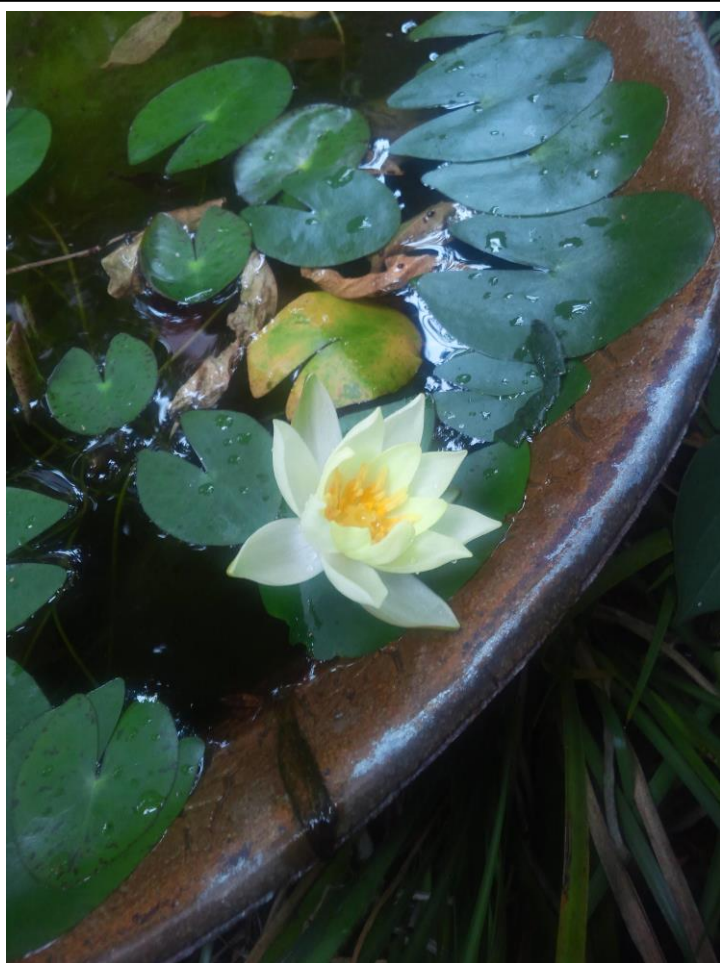
わたしの子どもの頃の記憶には、路上に生活する大勢のおじさんたちの姿があります。お墓の入り口で行き倒れているおじさん、お酒を飲みながら話しかけてくれるおじさん、半裸で横たわっているおじさん、本堂からスイカを抱えて盗んででてきたおじさんなど、本当にさまざまなおじさんたちとめぐり会っていたことを思い返します。いったいこのおじさんたちはどこから来たのでしょうか。子どもときには不思議で仕方がありませんでした。また、「食べるものに困っている」「家に帰る電車賃がない」といった理由でお寺を訪ねてくる

光照院副住職 吉水岳彦

おじさんたちもいました。その都度、住職が「何度でもできることではないからな」と言いながら、お寺のお掃除をしてもらって些少さしょうのお金や食べ物を渡したりしていたのを隣で見っていました。

わたしは、おじさんたちが困っているのなら、何か自分にもできることはないだろうかと思ひ、学校の先生や近所の大人に「ホームレスのおじさんたちに何かしてあげられないの?」と聞いたこともありました。

でも、決まって「あの人たちはね、自分から好きで路上に寝ているの。お風呂にも入っていないで



三年間一度も咲かなかった光照院の水蓮がついに

しよう。人の迷惑なんか考えもしない自分勝手な人たちなの。だから、余計なことはしなくていいの」「あの人たちは、昼間からお酒を飲んで怠けているのだから、仕方がないことなのよ」「他人には言えないようなことをしてきた人なんだから、あんまり近づいちゃダメだぞ」などという言葉が返ってきたのでした。

そんなことを大人たちに質問していたわたしでしたが、中学高校を卒業し、大学で佛教を学ぶようになるころには、路上に生活するおじさんたちに対して、「くさい」「汚い」「危ない人(怖い)」というイメージを持つようになっていました。そして、路上に生活するおじさんたちのことを日々目にしていながら、まったく気に留めることもなく毎日を過

ごすようになっていました。

◆お釈迦さま最期の言葉

大学の講義において、とても好きだった授業の一つに、基礎佛教学という授業がありました。お釈迦さまの伝記など、すでに知っていると思う基礎的な内容でも、意識して学ぶと知らないことがたくさんあるのだと気づかされた授業でした。はじめてお釈迦さまの最期の言葉を学び、感銘を受けたのもこの授業だったと思います。

お釈迦さまは「すべてのものはうつろいゆく。汝らは怠ることなく努め励めよ」と最期入滅の時に周囲にいた弟子たちに向かつて語りかけられたのでした。お釈

迦さまが最期にわたしたちへ残してくださった大切なメッセージは、無常の理をさとることと、

修行の精進に励むことの二つであつたのです。佛教の勉強をはじめて間もなく、小難しい理屈が多いと感じていた時でしたので、非常にシンプルなお諭しがスツと胸に入ったのです。

しかし、全然「すべてのものはうつろいゆく」この意味など考えてくることなく、ただ何となくその言葉の表面のみを受け取っていたことに気付かされたのは、大学を卒業しはずっと後のことでした。

◆無常を観ずる眼差し

二〇〇八年に縁あつて、新宿を中心に生活困窮者の支援を行う新宿連絡会という団体が主催する炊き出しに参加するようになりました。路上に生活する人も支援者も一緒になつて食事を盛り、いろいろなお話をしながら配食

の準備をする機会に恵まれたのです。

わたしが僧侶であることがわかると、おじさんたちは子ども頃にお寺の境内で遊んだことや珍しいお菓子をお坊さんからもらつたこと、自分の家の宗派のことなど、自分とお寺や佛教との関わりをたくさんお話してくださいました。その時に、はじめて感じたものです。このおじさんたちにも私たちと同じように父母があつて、同じように子ども時代があつて、同じように幸せになりたいと願つて今日まで生きていらつしやつたことを。

そして、小学校の狭い校庭はフェンス一枚隔てて公園になつており、わたしたちが校庭で遊んでいると、路上に生活しているたくさんのおじさんたちが、フェンス

に鈴なりになつてこちらを見ていたことを思い返しました。あの時には「なぜこんなにジロジロとみているんだろう、気持ちが悪い」とさえ思っていました。実は自分の幸せだった子ども時代を思い返していたのではなからうか、遠くに残してきた子どものことを想っていたのではなからうかなどと考えるようになりました。

お釈迦さまの前世譚であるジャータカ物語には、「キンスカの木」という物語があります。

お釈迦さまが、インドの王様に生まれ変わったときのこと。王の四人の王子たちが森の奥にあるキンスカの木という珍しい木を、森の番人に案内してもらつて順番に一人ずつ見に行きました。一番目の王子は木の枝にびっしり

と芽がついている姿を見、二番目の王子は大きな若葉が茂つている姿を見、三番目の王子は白い大きな花に覆われている姿を見、四番目の王子は黒い実がたくさん垂れ下がった姿を見たのでした。

四人の王子がキンスカの木について話をしたとき、四人とも全く異なる内容を主張してゆずらず、ケンカになりそうな険悪な雰囲気になりました。これを見ていた王様は、四人の王子に「お前たちが見たのは同じキンスカの木であり、季節によつて姿を変える。目の前のことしか見ていないと一部分しかわからず、全体の姿は見えてこない。これはキンスカの木にかぎらず、すべてのことに言えることだ」と諭したのでした。この物語のキンスカの木と同様に、わたしたちの人生にもまた

さまざまな季節がやつてきて、いつも実りの多い状態でもなければ、花をたくさんつけている状態でもありません。あくまでもそれは一時の状態であつて、その人のすべてではないのです。路上に生活するおじさんたちのことを偏見の目で見ていた時、

自分がおじさんの今の状態だけをみて、人間性や過去のすべてを勝手に「悪いもの」「間違つたもの」と決めつけ、自分とはまったく異質なものであるととらえていたことに気づかされたのです。お釈迦さまの仰せのとおり、「すべてのものはうつろいゆく」ものであるのに、今の状態だけを見て、その人のすべてを知つたものとして判断してしまう浅はかな自分がそこにいたのです。

わたしたちの住む世界は、刻一

刻と変化し続けて止まることがありません。そこに生きるものの現在の姿は、一時的な状態に過ぎず、自己を含むすべての存在が縁によつて変わつてしまうものであるとお釈迦さまは教えてくださっています。佛の教えをいただくわたしたちが世間を見る際に、こうした眼差しを持つことがいかに重要であるかを、おじさんたちとの触れ合いのなかに肌で感じさせられたのです。 合掌

《彫刻家 佐藤光重氏作の

佛像が光照院に寄贈される》

昭和三十五年に光照院本堂の欄間を彫刻した佐藤光重氏は、製作期間中お世話になつていた片山さま宅に佛像を彫つて贈られました。片山家で長く大切に祀りされたお佛像は、娘の内藤藤子さまに受け継がれました。しかし、引越してこの地を離れるにあたり、光照院にご縁があるからとご寄贈くださったのです。

佛像は二軀あり、「恵比寿・大黒像」と「虚空蔵菩薩像」です。



彫刻家佐藤光重作の恵比寿大黒像

周知の通り、恵比寿さまと大黒さまは、豊漁と豊作の神さまで、手を合わせるものに招福・商売繁盛をもたらしてください。こちらのお像はしばらくの間、光照院の玄関にてみなさまにお参りいただきたいと思ひます。

虚空蔵菩薩さまはその名の通り、虚空のように豊かな智慧と慈悲を持った菩薩さまです。特に日本では智慧を授けてくださる菩薩さまとして信仰されています。

また、数え年で十三歳になった男女のお祝いで、智慧と多福を祈る「十三詣り」のご本尊でもあります。光照院でも、数年後には「十三詣り」を行い、多くの子どもたちに親しんでいただけるようにしたいと考えています。ぜひとも光照院にお参りの際

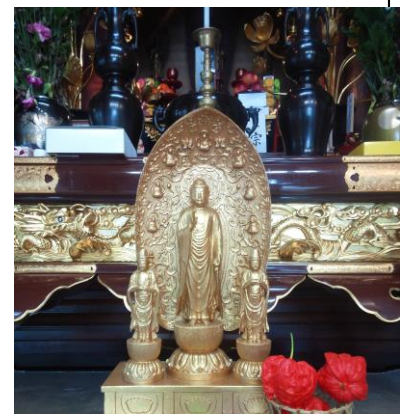
には、新たにお祀りしたお像にもお詣りくださいませ。 合掌

《光照院日帰り団体参拝》報告》

七年に一度御開帳される信州善光寺如来さまが、戦後初めて東京へお越しになった「両国回向院出開帳」への日帰り団参が五月中旬に行われました。

当日は住職を含めて十名が参加し、陸前高田市で被災した金剛寺ご住職のお話を聞き、津波で壊滅的な被害を受けた同市今泉町に、自力で家を建てた男性を追ったドキュメンタリー映画『先祖になる』を鑑賞して、東日本大震災について学びを深めました。

そして、「光照院でてるる会」でござ縁のある岩手県気仙地域の観音さまや、被災した岩手県大槌町・大船渡市・陸前高田市・宮城県気仙沼市・石巻市・福島県いわき市の七カ所にご安置される七軀の善光寺如来さまのご分身像を参拝させていただきました。津波後に泥の中から発見された観音さまの御姿は尊く、心から手が合わさりました。諸尊の御前でみなさん一緒にお念佛をお称えし、震災や津波で亡くなられた方々の極楽往生を願うと共に、早期の復興をお祈りしました。



被災地の寺院にご安置された善光寺如来さまご分身像

帰りに両国のちゃんこ料理屋『巴瀉』にて美味しいお食事をいただきながら、来年はみなさんで被災地に直接ご参拝とお見舞いに行こうという話になりました。

個人での大きな支援はなかなかできるものではありません。光照院では背伸びをせず、旅行会などで一緒に現地を訪ねて手を合わせ、お買い物を楽しむなど、小さくともできることを続けていきたいと考えています。また団体参拝の旅程が決まりましたら、みなさまにご案内させていただきます。(住職)

《被災地支縁活動者募集》

光照院青少年育成善導会(通称でてるる会)では、今後も岩手県内の仮設住宅等における支縁活動を企画します。具体的なことはまだ決まっておりますが、ご興味のある方は、副住職携帯電話

(〇九〇・六一一五・八一四七)もしくはEメールアドレス(gakugen@gmail.com)へご連絡くださいませ。多くの方のご参加を心よりお待ちしております。

《生活困窮者・震災支縁金》寄進》

為 東日本大震災横死者諸精霊位 一金拾萬圓 施主 島田成子殿

この他にも、高田明さま、宮本健一さま、阿部勝江さま、大畑勝高さまなど、震災や生活困窮者の支援に關して多くの檀信徒のみなさまから多大なご寄付を賜りました。まずはこの場をお借りして、心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

今後も光照院では、出来得る限り人と人との縁を支える「支縁」活動を展開してまいる所存です。みなさま、ご理解とご協力のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。合掌

お知らせ

《光照念佛会の発足》

光照院では、十一月よりお念佛とお写経を行う会を発足します。会の名前は寺院名を冠して「光照念佛会(でてるるねんぶつかい)」としました。開催日は毎月第三土曜日の午後十五時から二時間を予定しています。多くのみなさまのお越しをお待ちしております。

第一回目 十二月二十一日(土)

午後十五時から

《光照院十夜・放生会法要》

日 程 十一月十日(日)

御齋(昼食) 十一時三十分から

法 話 十二時三十分から

法 要 十三時十五分

※法要の出欠と塔婆の申込、ご参詣の人数を同封のハガキにて必ずお知らせください。

《光照院年中行事予定》案内

平成二十五年

十一月十日 十夜・放生会法要

十二月二十一日 光照念佛会

平成二十六年

一月一日 修正会

一月十八日 光照念佛会

二月十五日 光照念佛会

三月十五日 光照念佛会

三月十八〜二十四日 春彼岸

四月十九日 光照念佛会

五月十七日 光照念佛会

六月八日 施餓鬼会法要

《ひとさじの会の活動について》

副住職が代表をつとめる社会的に弱い立場の方々を支縁する「ひとさじの会」の活動は、毎月第一・第三月曜日十五時から光照院にて行われています。もしご興味がございますましたら、どうぞ遠慮なくお越しくださいませ。一緒におむすびを作って、良いご縁を結びましょう。 合掌

《御仏具料寄進》

為 壽心潔守居士五七日忌

志拾萬圓 施主 島田千ヨ殿

為 常明院貞譽壽称大姉十七回忌

参拾萬圓 施主 高崎俊一殿

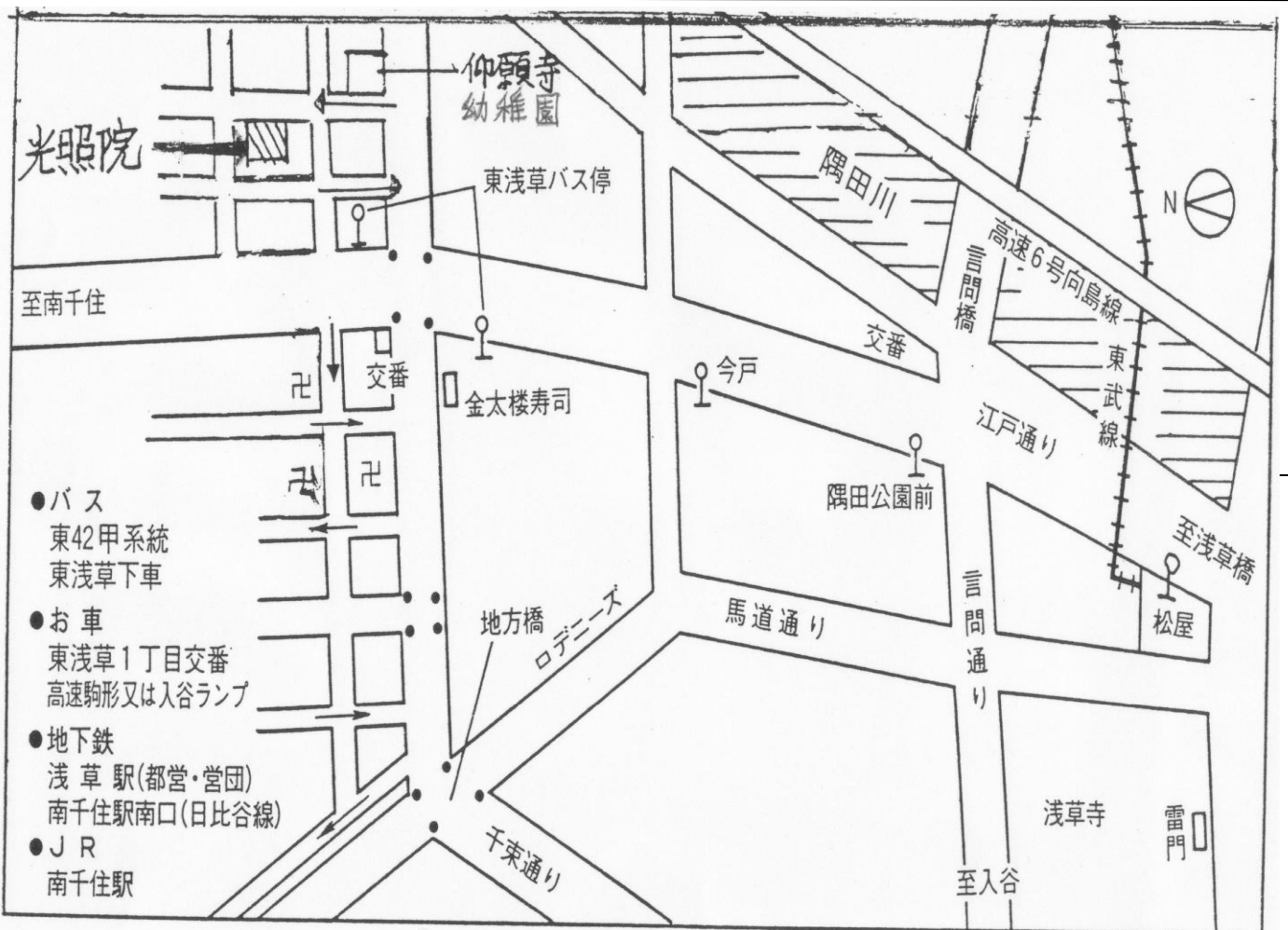
為 西蓮院妙照徳念大姉三十七回忌

志拾萬圓 施主 田 宗弘殿

橋本和夫殿

《光照院へのアクセスについて》

台東区循環バス「北めぐりん」「浅草駅」から乗車し、光照院そばの九番「清川一丁目」停留所で降車ください。また、「甲42南千住ゆき」バスご利用の場合は、「浅草松屋前」停留所から乗車し、「東浅草」停留所で降車ください。上記の地図を参考にお越しくださいませ。



写真でつづる光照院からの報告

《阿弥陀さまの御画像の頒布》

多くの方が家の掃除を毎日行い、身体も清められていると思います。でも、心のお掃除はいかがでしょうか？

核家族化が進んだ昨今、ご家庭にお佛壇がない家も増えて参りました。しかし、忙しさに我を忘れる日々を送るようであれば、一日に一度でも如来さまに手を合わせ、お念佛申す静かなひと時を設けることが、自身の心の休養になるように思います。

この度、お佛壇のないご家庭や一人暮らしの若い方のために、左に載せてあります美しい如来さまの御画像（スタンド式）をご用意いたしました。ご入用の方は、どうぞ遠慮なくお寺にご連絡をくださいませ。



《佛式結婚式》

副住職の親友であり、ひとさじの会で事務局長をつとめる藤牧浩司さんが、同会にボランティアで参加していた麻美さんとご結婚されました。

ご縁の場となった光照院の住職を戒師に招き、先日、佛式結婚式が執り行われました。お寺というとお葬式のイメージが大きいと思うのですが、このようにめでたい式も行うことがあるのです。写真は、行華（あんげ）といって、新郎新婦が如来さまにお花を供える儀式です。

はるか昔、雲童子という青年と賢者という名の少女が、一緒に燃灯佛さまに花を供養しました。そして、互いに悟りを開くまで、生まれ変わるたびに結婚をしようと誓ったのでした。

誓いの通り、二人は生まれ変わるたびに夫婦となり、最後に人と生れた時の名をシッダールタ太子とヤショーダラ妃といいます。すなわち、お釈迦さまと後にお弟子となった悟りを開くお妃さまです。この故事にならって佛式結婚では、二人で如来さまにお花を供え、未来永劫に離れぬことを誓うのです。お二人の末永い幸せを心よりお祈りいたします。



佛式結婚式 二人が誓いの華を如来さまに供えます♪

編集後記

腰の手術で入院し、お施餓鬼会に出られなかった住職もようやく調子を取り戻しました。最近では、お陰様で動きすぎではないかと家族が心配になるほど元気になりました。それにともない、入院前後には控えめだったお酒の量も増えてきて、体重も……。今度は教育入院にならないように願う家族一同です。（副）

《退院後の住職の一句》

入院し

吞めず

食えずで

骨けずる

あみだぶつぶつ

歩めるうれしさ

住職拝

《てらねい沙羅の一句》



猫のわたしももらさずに

救うてくださいるお念佛

にゃあみだぶつ

にゃあみだ♪

てらねい 沙羅拝